

姥ヶ原遺跡
御射山北遺跡
裏の尾根遺跡

平成15年度 住宅建設に先立つ姥ヶ原遺跡
(第3次)・御射山北遺跡緊急発掘調査、診療
所建設に先立つ裏の尾根遺跡確認調査報告書

2004. 3

長野県原村教育委員会

うば が はら い せき
姥ヶ原遺跡
み さ やま きた い せき
御射山北遺跡
うら お ね い せき
裏の尾根遺跡

平成15年度 住宅建設に先立つ姥ヶ原遺跡
(第3次)・御射山北遺跡緊急発掘調査、診療
所建設に先立つ裏の尾根遺跡確認調査報告書

2004. 3

長野県原村教育委員会

表紙地図 ○印が御射山北遺跡・裏の尾根遺跡
裏表紙地図 ○印が姥ヶ原遺跡 10,000分の1

序

このたび平成15年度に実施した姥ヶ原遺跡・御射山北遺跡・裏の尾根遺跡発掘調査報告書を刊行することになりました。

姥ヶ原遺跡と御射山北遺跡は個人の住宅建設、裏の尾根遺跡は診療所建設に先立つ遺跡確認調査で、国庫から補助金交付を受けて村教育委員会が実施したものであります。

姥ヶ原遺跡は第3次調査になりますが、縄文時代後期の住居址2軒と配石の発見があり、当方では発見例が少ない縄文時代後期の好資料を提示することができたものと思っています。御射山北遺跡は中心から外れていたこともあり、遺跡の破壊は少なくてすみました。裏の尾根遺跡は遺跡を確認するまでには至りませんでした。

遺跡は現状のまま保存することが最も望ましいことであります。村内には100を越える遺跡が知られていましたが、諸開発により年々少なくなっています。その流れの中で、いかなる形で保護していくのが妥当な方法か検討しております。しかし、開発の波は早く発掘調査に携わるたびに、失われる貴重な文化遺産を大切にするとともに、後世に伝えて行く責任を強く感じるものであります。

発掘調査にあたり県教育委員会のご指導、多くの皆様のご協力に深甚なる謝意を表する次第であります。

発掘現場では作業員の皆様のご苦労により、失われていく貴重な資料を記録に残すことができました。また、発掘調査報告書刊行に至る過程で、お世話をいただいた皆様にたいして厚くお礼申し上げます。

平成16年3月

原村教育委員会

教育長 津金喜勝

例　　言

- 1 本報告は、平成15年度住宅建設に先立って実施した長野県諏訪郡原村菖蒲沢に所在する姥ヶ原遺跡、判之木に所在する御射山北遺跡の緊急発掘調査、診療所建設に伴って実施した原村中新田に所在する裏の尾根遺跡の遺跡確認調査報告書である。
- 2 発掘調査は、国庫から発掘調査補助金交付を受け原村教育委員会が、姥ヶ原遺跡は平成15年5月1日から8月22日、御射山北遺跡は12月15日から25日に緊急発掘調査を、裏の尾根遺跡は8月18日から22日に遺跡確認調査をそれぞれ実施し、整理作業は平成15年8月25日から16年3月26日まで行った。
- 3 姥ヶ原遺跡における基準杭設置は株式会社日研コンサルに委託し、現場における実測は小林りえ・坂本ちづる、記録および写真撮影は平出一治が行い、実測の一部は株式会社写真測図研究所に委託した。御射山北遺跡における基準杭設置は株式会社写真測図研究所に委託し、現場における記録および写真撮影は平出、裏の尾根遺跡における記録および写真撮影は平出が行った。
- 4 姥ヶ原・御射山北・裏の尾根遺跡の図面・写真等の整理は小林・坂本が行い、姥ヶ原遺跡出土の土器実測は株式会社シン技術コンサルに委託し一部を坂本が行い、石器の実測は株式会社写真測図研究所・株式会社シン技術コンサル・株式会社東京航業研究所、石製品は株式会社シン技術コンサルにそれぞれ委託し、土器の拓本は津金たか子が行った。御射山北遺跡の石器実測は株式会社東京航業研究所にし、執筆は平出が行った。
- 5 本調査の出土遺物、記録等はすべて原村教育委員会で保管している。
なお、本調査関係資料には、姥ヶ原遺跡は51、御射山北遺跡は59、裏の尾根遺跡は63の原村遺跡番号を表記した。
発掘調査から報告書作成にわたって、多くの方々から御指導・御助言をいただいた。厚く御礼申し上げる次第である。

目 次

例 言

目次・図版目次・表目次

I	姥ヶ原遺跡	1
1	発掘調査の経過	1
2	調査の方法	3
3	遺構と遺物	8
4	まとめ	25
II	御射山北遺跡	26
1	発掘調査の経過	26
2	調査の方法	27
3	遺 物	29
4	まとめ	29
III	裏の尾根遺跡	30
1	遺跡確認調査の経過	30
2	遺跡確認調査の方法	31
3	まとめ	33
IV	結 語	34
	報告書抄録	

図 版 目 次

第1図	原村域の地形断面模式図（宮川—姥ヶ原・御射山北・裏の尾根—赤岳ライン）	1
第2図	姥ヶ原・御射山北・裏の尾根遺跡の位置と周辺遺跡	4
第3図	姥ヶ原遺跡発掘区域図・地形図	6
第4図	姥ヶ原遺跡全体図	7
第5図	姥ヶ原遺跡第2号住居址実測図、出土土器・石器実測図	9
第6図	姥ヶ原遺跡第3号住居址実測図	11・12
第7図	姥ヶ原遺跡第3号住居址主柱穴想定図	13

第8図	姥ヶ原遺跡第3号住居址出土土器実測図・拓影	15
第9図	姥ヶ原遺跡第3号住居址出土石器実測図	16
第10図	姥ヶ原遺跡小竪穴2・3・4実測図	18
第11図	姥ヶ原遺跡小竪穴2・3出土土器・石器実測図	19
第12図	姥ヶ原遺跡配石1実測図	20
第13図	姥ヶ原遺跡配石1・遺構外出土土器	21
第14図	姥ヶ原遺跡配石1出土石器実測図	22
第15図	姥ヶ原遺跡配石1・遺構外出土石器実測図	23
第16図	姥ヶ原遺跡遺構外出土石器実測図	24
第17図	御射山北遺跡発掘区域図・地形図	28
第18図	御射山北遺跡出土石器実測図	29
第19図	裏の尾根遺跡確認調査区域図・地形図	32

表 目 次

表1	姥ヶ原遺跡・御射山北遺跡・裏の尾根遺跡の位置と周辺遺跡一覧	5
表2	姥ヶ原遺跡第3号住居址柱穴等一覧表	14

I 姥ヶ原遺跡

1 発掘調査の経過

(1) 発掘調査に至る経過

遺跡内の伐採・抜根作業が行われたことにより住宅建設の計画を知るが、たまたま予定地に姥ヶ原遺跡（原村遺跡番号51）が所在していたため、その保護については数回にわたり協議を行った。

本来なら遺跡は現状のまま保存することが最も望ましいことであるが、前記したようにすでに伐採は終わっていたうえ、住宅建設の要望は強く、また、隣接地は平成元年度に諏訪南インター原村工業団地造成並びに村道改良事業に先立って緊急発掘調査を実施し、記録保存を計った経過があり「記録保存やむなき」との結論に至り、平成15年度に緊急発掘調査を実施し、記録保存をはかる方向で同意をみることができた。

その後も協議を重ね、原村教育委員会は国庫から発掘調査補助金交付を受け、平成15年5月1日から8月22日にわたり緊急発掘調査を実施した。

(2) 調査組織

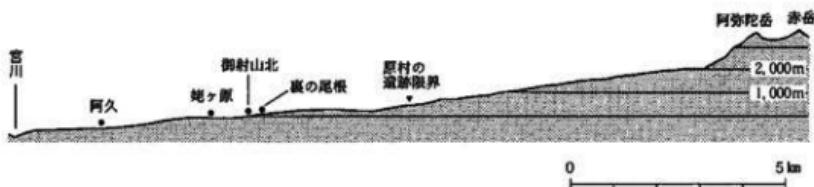
事務局 原村教育委員会

教育長 津金 喜勝

学校教育課長 佐貫 正憲

文化財係長 平出 一治

文化財係 平林とし美



第1図 原村域の地形断面模式図（宮川—姥ヶ原・御射山北・裏の尾根—赤岳ライン）

調査団	團長	津金 喜勝	(原村教育委員会教育長)
調査担当者	平出 一治		
調査員	武藤 雄六	平林とし美	
調査参加者	発掘作業	小島久美子 小林 智子 坂本ちづる 田中 初一	小島 政雄 小林 りえ 清水 正進 津金たか子
	整理作業	小島久美子 小林 りえ	小林 明美 坂本ちづる
			西沢 寛人 小林 智子 津金たか子

(3) 発掘調査の経過（抄）

- 平成15年5月1日 発掘準備をはじめる。
- 9日 現地で打ち合わせを行う。
- 14日 現地で建築位置（発掘調査位置）の打ち合わせを行う。
- 6月11日 重機でトレーナーの掘削を行い、ロームまでの深さを確認し表土剥ぎをはじめる。
- 16日 機材の搬入、テント設営を行う。遺構の検出作業を人力ではじめる。
- 23日 集石（後に第3号住居址と判明）の検出写真撮影を行い、精査をはじめる。
- 30日 第2号住居址、配石1の精査をはじめる。
- 7月2日 集石、礫（後に第3号住居址判明）の実測をはじめる。
- 4日 小豎穴（後に第3号住居址柱穴と判明）、焼土（後に第3号住居址炉址と判明）の精査、集石の石取り上げをはじめる。
- 15日 磚の取り上げをはじめる。
- 17日 小豎穴（第3号住居址柱穴）の実測をはじめる。
- 22日 小豎穴（第3号住居址柱穴）内の磚取り上げをはじめる。
- 8月1日 第2号住居址の実測、片付けをはじめる。
- 18日 配石1の実測をはじめる（委託）。
- 21日 配石1の石取り上げ、配石下層の調査をはじめる。
- 22日 配石下層の調査、片付けを行い調査は終了。

2 調査の方法

(1) 位置と環境

姥ヶ原遺跡（原村遺跡番号51）は、長野県諏訪郡原村菖蒲沢区の南方500mほどの八ヶ岳西麓に位置する。この辺りには当地方特有の東西に細長く伸びる大小様々な尾根がみられ、尾根上から南斜面に、第2図と表1に示したように縄文時代を中心とする数多い遺跡が埋蔵されている。

その一つである本遺跡は、裾野の先端部付近に位置し、八ヶ岳から流下する矢の口川左岸の緩やかな北斜面に立地する。矢の口川の浸蝕は著しく遺跡北側は急激に落ち込み、本来遺跡として注意されるような地形ではない。標高は950m前後を測り、地目は山林であったが「発掘調査に至る経過」で述べたようにすでに伐採は終了していた。平成元年には遺跡を取り囲むかたちで諏訪南インター原村工業団地の造成が行われ、本調査地点と北西の僅かな範囲が取り残されていただけである。

本遺跡は縄文時代後期であるが、村内で後期の住居址を発見した遺跡を上げてみると、対岸の山の神遺跡（原村遺跡番号50）、前尾根遺跡（同20）、恩膳遺跡（同24）、第2図から外れているが大横道上遺跡（同32）、臥竜遺跡（同32）、山の神上遺跡（同75）の6遺跡にすぎない。それらは尾根上から南斜面に立地する遺跡であり、本遺跡のように深い沢に面した北斜面の遺跡はみあたらない。なお、矢の口川との比高差は14m程である。

これより西は、約1000m先でフォッサマグナの西縁である糸魚川一静岡構造線の断層崖に沿って北へ流れる宮川によって断ち切られている。

遺跡の発見は、たまたま本調査地点を故五味富重氏が普通畑として活用していた折りに、土器と石器を発見したことにはじまるが、その後、昭和63年度に諏訪南インター原村工業団地予定地内遺跡確認調査を、平成元年度に造成工事（村道改良）に先立つ緊急発掘調査を実施し、縄文時代後期の敷石住居址1軒と小竪穴1基を発見している。

(2) 調査方法と層序

発掘調査の対象は、第3図に示した住宅地とそれに関連する雑排水処理施設、駐車場などの現状変更地域である。対象地に南北方向のトレンチを重機で掘削し、ロームまでの深さを確認し除去する土の厚さを決め、表土剥ぎを重機で行った。ここで黒色土中に構築されている遺構を考えなかつたため、大きな間違いをしてしまった。

第2図 姉ヶ原・御村山北・裏の尾根森林の位置と周辺森林



引き続き人力で遺構の検出に努め、検出した小竪穴（後に住居址の柱穴と判明）は、半剖して埋土の堆積状況の観察と記録を行い、その後で全掘した。

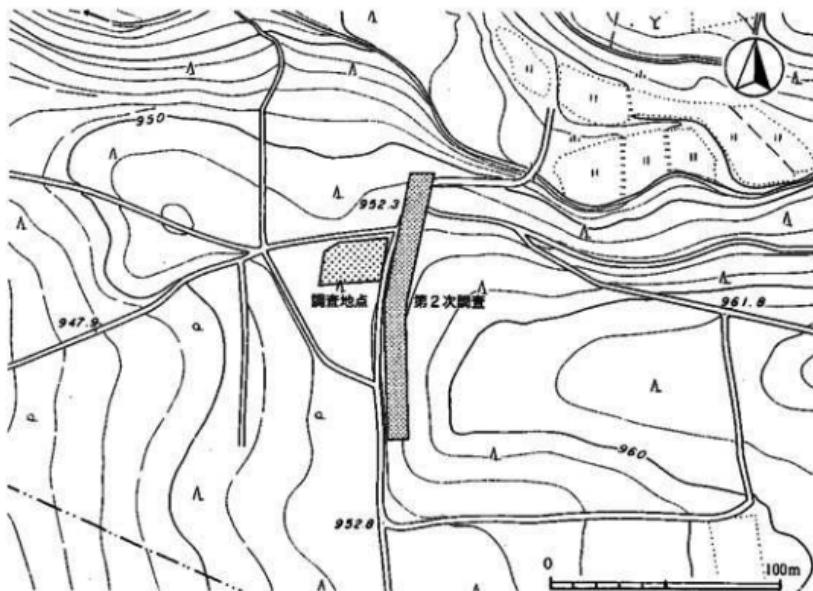
本調査における遺構番号は、第2次発掘調査の続番号を付した。したがって住居址は第2号住居址、小竪穴は小竪穴2、配石は配石1からとなる。

遺物の取り上げは遺構別に行い、遺構の実測等は、座標値をもたせた測量基準杭を打設して行い、実測の一部は株式会社写真測図研究所に委託した。ちなみに調査面積は508m²である。

土層は調査地の東と西とでは大きな違いがみられた。東側は表土の直下がローム層になり、普通畑として活用されていた時があり、ローム面には耕作による歓がみられた。西に寄るに従い黒色土の堆積は厚くなるが、総体的に色調の変化には乏しいが基本的には次の通りである。

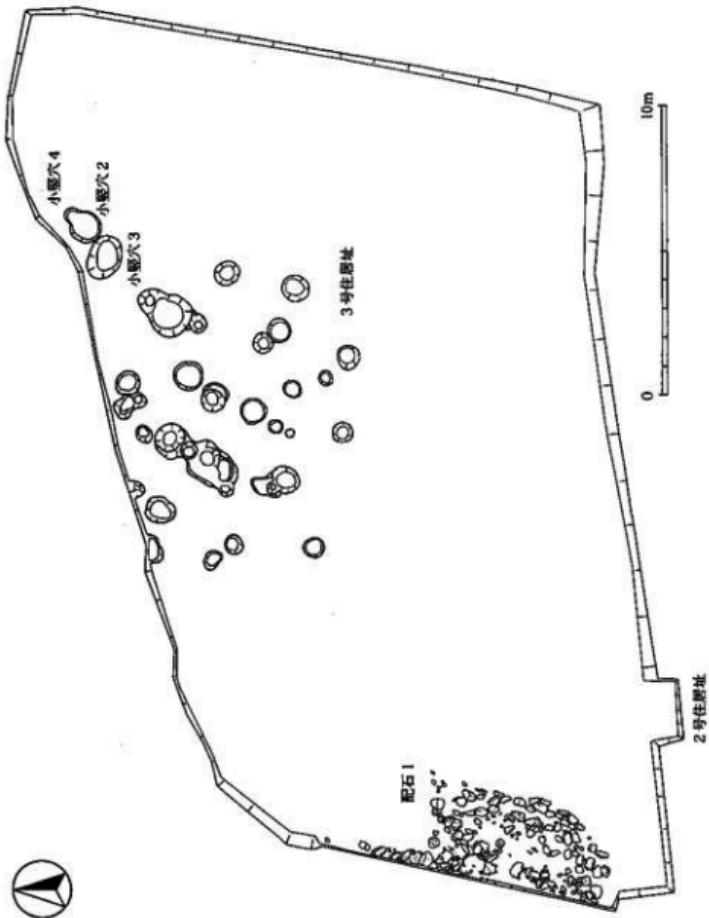
第I層 ローム混褐色土・黒褐色土・黒色土 表土。旧畑の耕作土で15cm前後、西に寄るほど黒色が増す。

第II層 真黒色土層 西に寄るほど厚くなり、第3号住居址より西でみられた。この層の上半部が遺物包含層である。



第3図 線ヶ原遺跡発掘区域図・地形図（1：2500）

第4図 姥ヶ原遺跡全體図 (1:200)



第Ⅲ層 ローム漸移層。

第Ⅳ層 ローム層。

3 遺構と遺物

住居址2軒、小竪穴3基、配石1基を発見したが、重機による表土剥ぎを厚くしたこととその一部を破壊してしまった。第3号住居址は、柱穴を小竪穴、炉址を焼土址と思い調査を進め、終了間際に住居址を認定するというミスをしている。

(1) 住居址

第2号住居址（第4・5・6図、写真図版1）

調査区域の南壁で埋甕炉を発見したことで、住居址の埋没を確認した。重機による表土剥ぎでその多くを破壊した後であり、炉址北側については一切不明なうえに、南側は調査区域外となる。したがって、本住居址は埋甕炉だけである。

住居址の規模を確認するため、調査区域南壁の清掃、土層の観察を繰り返してみたが、色調の変化に乏しく、黒色土中に構築されていたこともあり落ち込み・床面などを確認することはできなかった。そこで、埋甕炉の南と西220×80cmほどの範囲を掘り下げ、床面の検出を試みたが、やはり硬い床面を確認するまでには至らなかった。ほぼ同レベルに焼土と礫の散乱がみられ、埋設土器の縁がほぼ同レベルであり、この面ないしはその直下が床面と思われる。

炉は、埋設土器の縁には平板石がのり、土器内に平板石1点が斜めに落ち込み、土器の縁に沿って石圓状に石が並ぶ。崩れたためか今ひとつ確りしないが、土器埋設石窓炉の可能性は高い。土器内の底近くに焼土塊が落ち込んでいた。

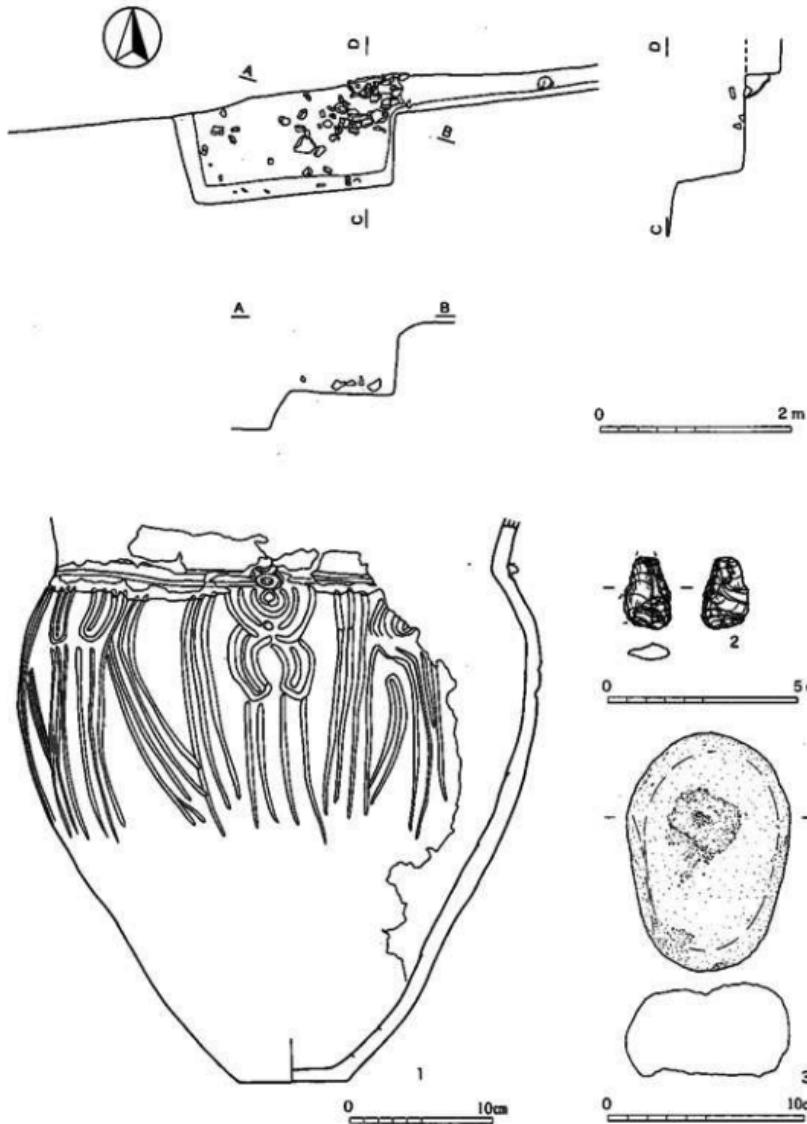
発見した遺物は土器と石器がある。

土器 炉体土器と僅かな土器破片がある。第6図1は炉体土器で、口縁部を欠損するが、破損面は磨滅している。注口土器と思われる破片もあるが、図示することはできなかった。縄文時代後期の壺之内式である。

石器 石鎌1点と凹石1点がある。第6図2は黒曜石製の石鎌、3は安山岩製の凹石である。

第3号住居址（第4・7～10図、写真図版2～6）

本址は「調査方法と層序」でも述べたように、黒色土中に構築されていることを考慮し



第5図 姥ヶ原遺跡第2号住居址実測図(1:60)・出土土器
石器実測図 1 (1:4) 2 (2:3) 3 (1:3)

ないまま表土剥ぎを進め、また、遺構の検出作業では、柱穴をはじめ住居址の規模が大きかったこともあり、柱穴を小竪穴、炉址は小竪穴群に係わる焼土址、礫のまとまりを集石と誤認し、一つの遺構として認定することができなかった。

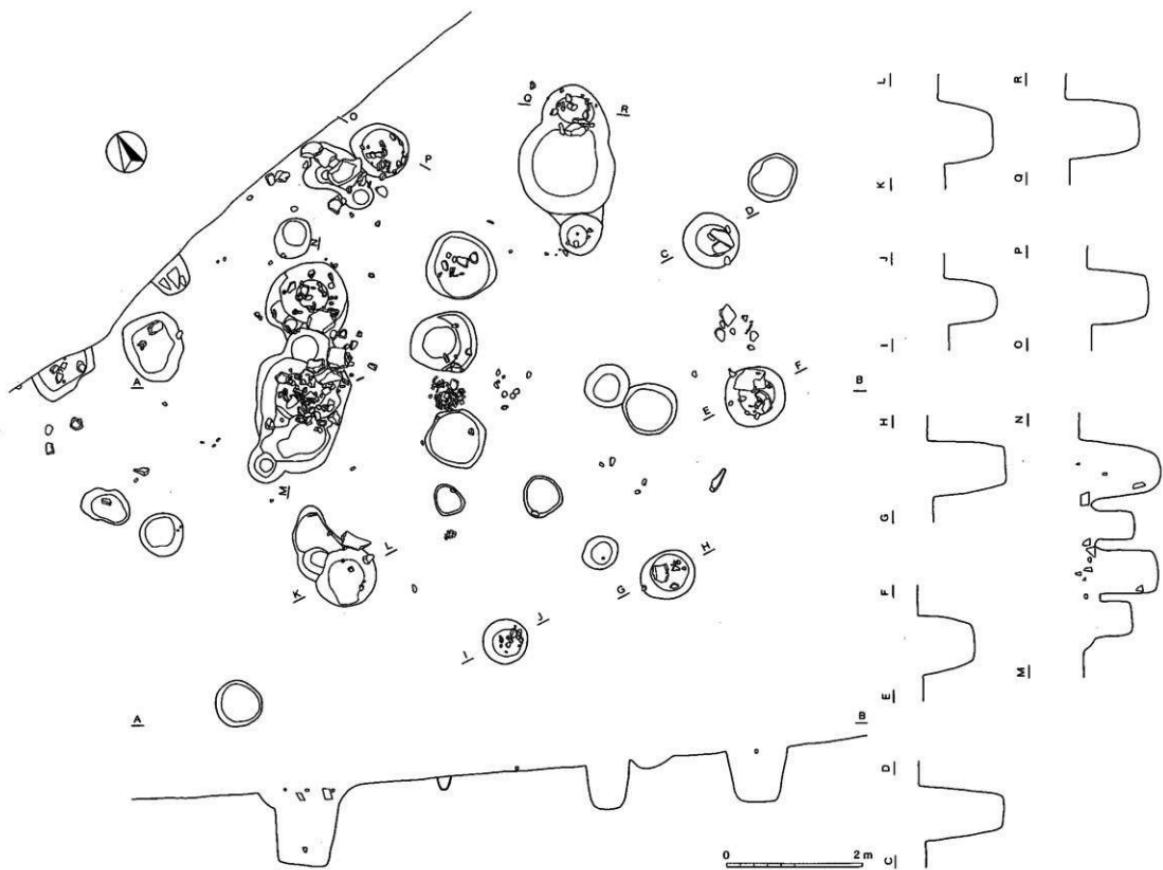
精査を進める過程で住居址の存在を考えたが、すでに調査終了段階であり全貌を明らかにすることはできなかった。したがって、大きな間違いをしているかもしれない。茅野市の鶴田、中ッ原、稗田頭A、立石、阿弥陀堂など多くの遺跡で酷似する住居址の発見があり、該期には掘り込みの浅い住居址が普遍的に構築されていたようで、本址を住居址にすることには間違いはなさそうである。

住居址は、調査地中央北寄りの径11mほどくらいの範囲で、柱穴・貯蔵穴等と思われるP3～P33の30本を発見したが、柱痕の認められるものはなかった。主柱穴はその規模と類似点から第7図に示したP3、P4、P5、P6、P13、P27、P15、P21、P12、P31の10本と思われ、握り拳大から人頭大の石が複数出土した。大きな石は中心部からの発見はなく、壁に密着するものや食い込んだものがあり、柱を固定するために入れられた石のようである。柱穴などの規模は表2に示したが、主柱穴は人一人が入ることができる大きなものばかりである。

住居跡の規模は、壁や硬い床面を確認できなかったため不明であるが、主柱穴を結ぶ外周で 8.87×7.90 mと大きく、平面形は北西に直線部を有するカマボコ形である。直線部は自然傾斜の低い所になるが、ここが奥壁方向と思われる。P27、P28、P31、P15の4本がほぼ直線的に並び、主柱穴P28にP32が、主柱穴P15にP29が接し、主柱穴P27と主柱穴P31に挟まれたP28の埋土は黒色土で、主柱穴P27・P31とは明らかに違いP28が新しく、形態は柱穴状であるが、埋土上半部に握り拳大から人頭大の石が集石状に入り、第10図4の小形定角磨製石斧、6の磨製石斧、7の打製石斧、10の凹石が出土した。主柱穴P31に接する集石は握り拳大から人頭大の石で、大きな扁平石は据え置かれた状態で、近くから第9図4のミニチュア土器、出土地点を記録しなかったため遺構外遺物とした第17図9・10の定角磨製石斧が出土している。主柱穴P13にP33が、主柱穴P21にP20がそれぞれ奥壁寄りに並び、この奥壁部には何らかの施設（祭壇）の有ったことを示唆しているようである。

主柱穴P4とP31を棟持ち柱に想定すると、その線上を中心に第8図に示したように主柱穴はP5とP3、P6とP12、P13とP21、P27とP15が、また、主柱穴に接する前記したP32とP29、P33とP20がきれいに向きあっている。P7、P10、P14も形態からみて柱穴であり、この3本はほぼ直線に並び間仕切りがあったのかもしれない。

奥壁部のP19、P16、P17、P18は主柱穴の外に並ぶが、その位置関係から本址に伴うものと思われる。しかし、P18とP26のようにその半分位を調査しただけのものもあり、北に続く調査区域外のこととも考慮しなければならないようである。



第6図 施ヶ原遺跡第3号住居址実測図 (1:60)

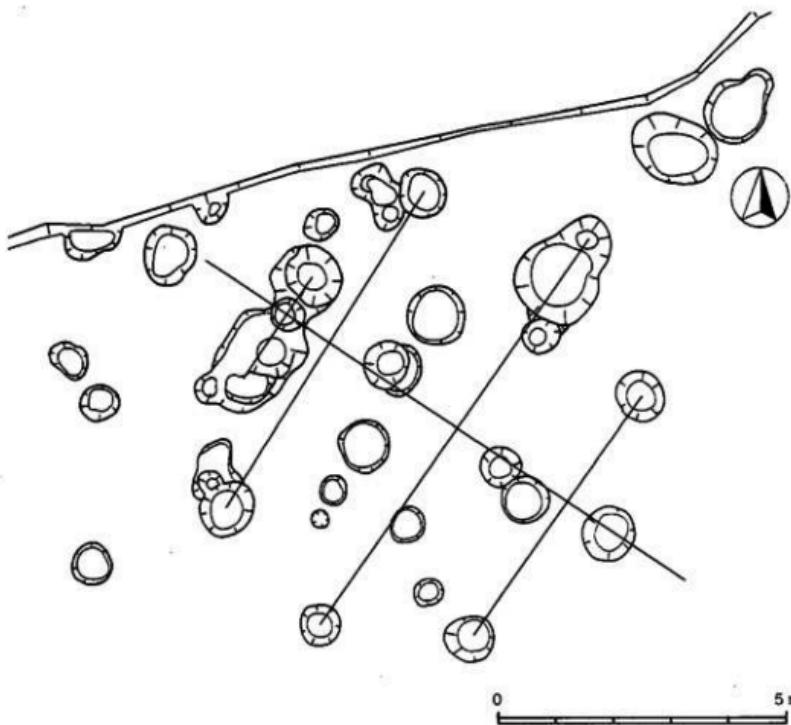
柱穴からは表2に示した土器破片と石器が出土した。その多くは道具としての使命は終わっていたものと思われ、凹石・蜂の巣石は前記したように、柱を固定するために入れられた單なる一つの石であったようである。

炉は地床炉2、埋甕炉1の3ヶ所を検出し、便宜的に焼土1～3と呼んだが同時性、新旧関係を明確にすることはできなかったが、焼土3の埋甕炉が新しいようである。

焼土1は地床炉で、上面はすでに削り取られていたが火床で、第9図5の深鉢胴部破片と数片の同個体土器が焼土に埋まる状態で出土したが、それらは横位であり埋設土器とは考えられない。

焼土2も地床炉で、やはり上面は削り取られていたがスリ鉢状に凹む火床で、掘り掌大的礫が散乱していた。

焼土3は埋甕炉で、焼土が弱かったうえに土器の埋設方法に疑問点が多い。第9図1に示した高さ46cmを計る深鉢が炉体土器であるが、下胴部20cmほどはロームに埋まり形態を

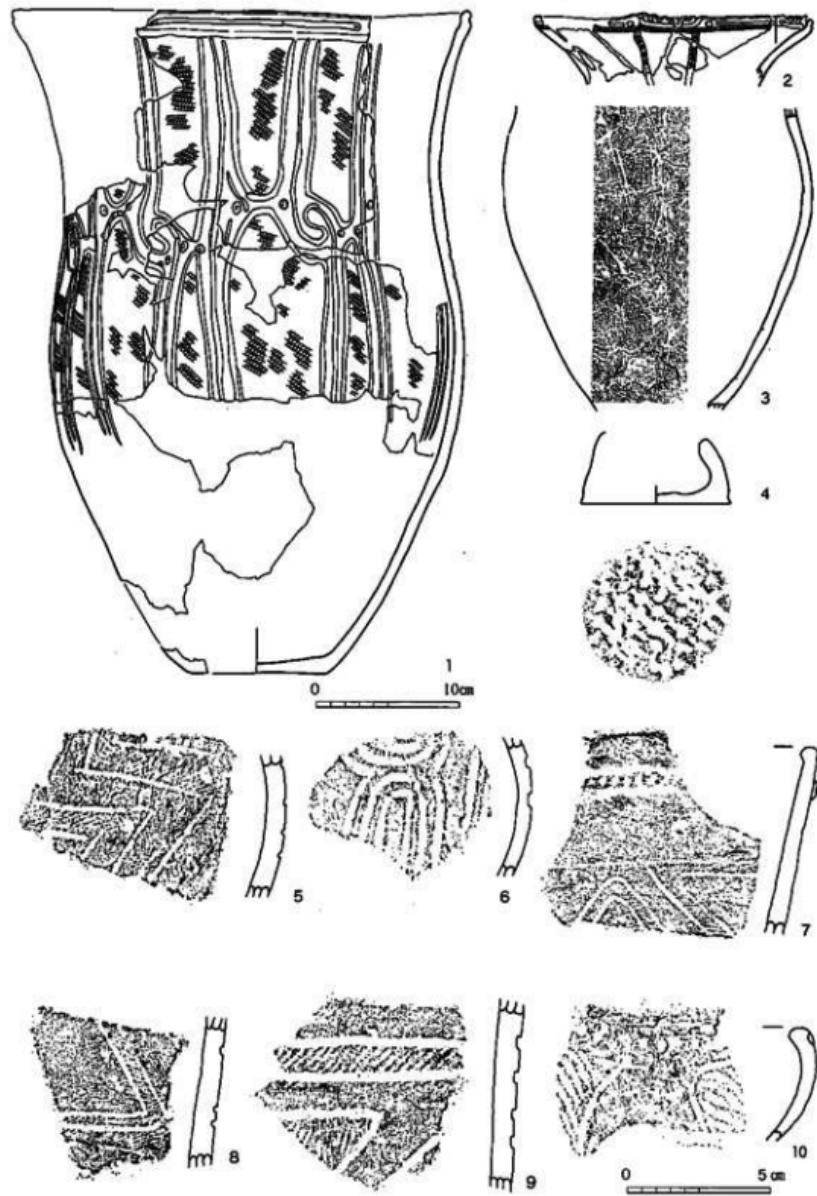


第7図 姥ヶ原遺跡第3号住居址主柱穴想定図（1：100）

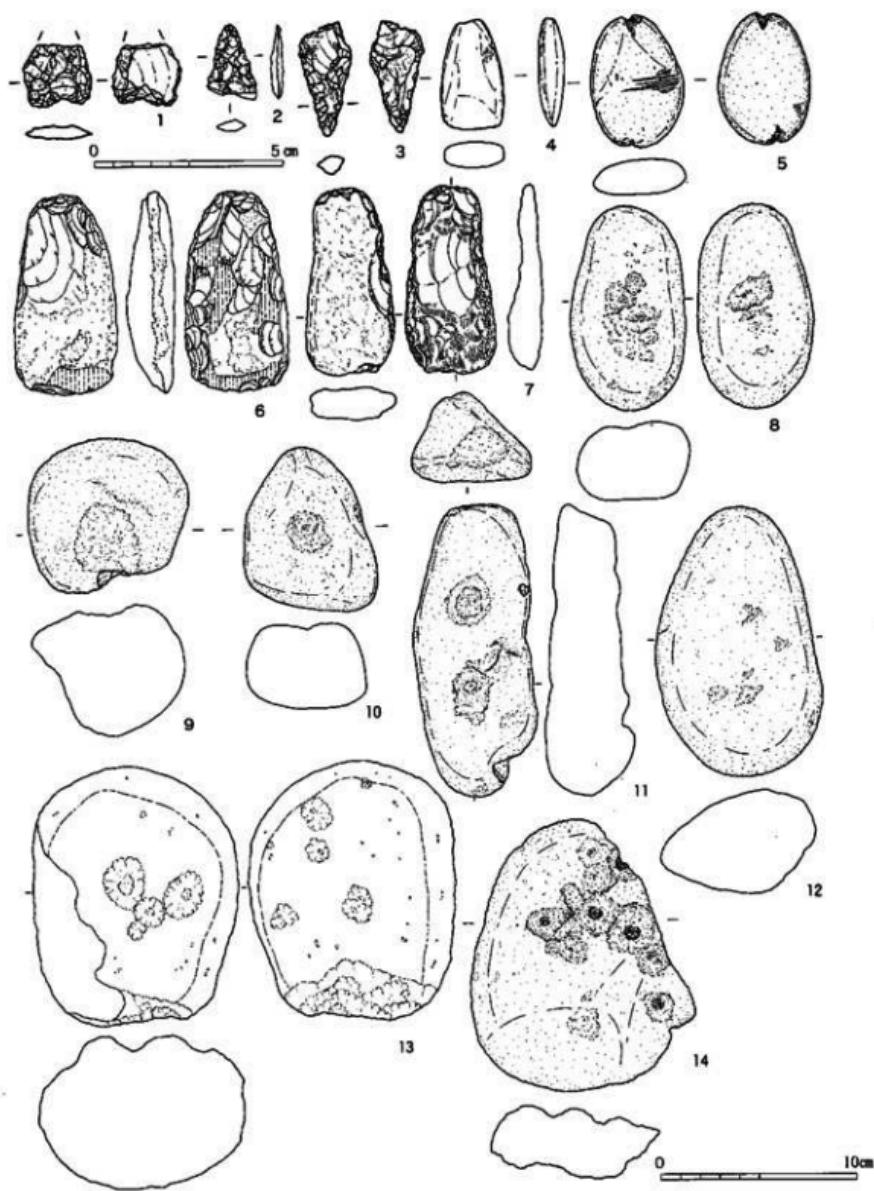
表2 第3号住居址柱穴等一覧表

()は推定

柱穴番号	平面規模cm		深さcm	出 土 遺 物	遺物図版番号
	東西	南北			
主柱穴3	82	86	124	土器破片11	
主柱穴4	92	88	83	土器破片10、石錐1	
主柱穴5	84	71	114	土器破片12	
主柱穴6	70	66	77	土器破片15	第9図6
7	70	62	74		
8	58	50	68	土器破片6	
9	81	80	11	土器破片24	第9図7・8
10	68	60	95	土器破片11、凹石1、	第10図10
11	142	152	45	土器破片19	
主柱穴12	(86)	(100)	109	土器破片45、凹石1、蜂の巣石1	第10図12・14
主柱穴13	96	(90)	80	土器破片39	
14	56	60	13	土器破片11	
主柱穴15	126	(120)	124	土器破片61、凹石1	第10図12
16	64	66	51	土器破片2	
17	86	102	20	土器破片18	
18	56	(60)	167	土器破片1	
19	70	70	13	土器破片7	
20	85	116	57	土器破片15、石錐(破損)1	第10図1
主柱穴21	80	85	86	土器破片8	
22	104	100	35	土器破片55、凹石1	第9図9、第10図11
23	84	93	171	土器破片5	
24	90	94	11	土器破片7	
25	59	63	22	土器破片1	
26	100	(70)	39	土器破片26	
主柱穴27	(136)	(90)	79	土器破片18、石錐1、蜂の巣石1	第10図13
28	150	(132)	119	土器破片20、磨製石斧2、打製石斧1、凹石1	第9図10、第10図4～7・10
29	60	56	51	土器破片9	
30	42	50	5		
主柱穴31	(70)	(70)	81		
32	(60)	58	59		
33	66	(120)	19		



第8図 繩ヶ原遺跡第3号住居址出土土器実測図・拓影 1~3 (1:4) 4~10 (1:2)



第9図 端ヶ原遺跡第3号住居址出土石器実測図 1~3 (2:3) 4~14 (1:3)

とどめていたが、上半部の破損は著しく、外側にぐしゃぐしゃと崩れ落ちた状態であった。破片が外側に落ちていたことは、床面より上に出ていたために生じた破損である。据え付けた煮沸土器と考えるには底部に欠損がみられ適さない。下胴部だけを埋設した埋甕炉とかんがえたが、類例を聞くことはなく今後に残した課題は大きいようである。埋甕炉内に第9図3の深鉢が入れ子となり、火熱のため脆く復元できない深鉢の下胴部がやはりここでつぶれ、3個体の土器が重なり合い複雑にし理解できないものにしていった。

発見した遺物は土器と石器があり、前記したように柱穴を小竪穴と考え調査を進め、遺物は小竪穴別に取り上げたが、小竪穴に伴わなかった遺物は遺構外としたため、その多くは本址の範囲内であったが出土地点の記録がなく、「遺構外出土の遺物」で説明したい。

土器 炉体土器・深鉢・土器破片がある。第9図1は炉体土器で全体形は復元できたが、前記したように特異な出土状態であったため上半部の残存は少なく底部にも欠損がある。2は深鉢の口縁部で、P10出土の破片3点と出土地点を記録しなかったため遺構外遺物とした破片が接合したものである。3は口縁部と底部を欠損する深鉢で、炉体土器内からの出土で火熱のため脆く、外面には浅い沈線状の整形痕がみえる。4はミニチュア土器の下胴部で、主柱穴P15近くからの出土である。破損面は磨滅し擬似口縁状になるが再加工を施したものではなく、使用によるものであろう。5~10は深鉢の破片で、5は炉址1、6は主柱穴P6、7と8はP9、9はP22、10は主柱穴P27出土で、縄文時代後期の堀之内式である。

石器 石鐵2点、石錐1点、磨製石斧2点、石錐1点、打製石斧1点、凹石5点、蜂の巣石2点がある。

第10図1・2の石鐵と3の石錐は黒曜石製で、1はP20、2は主柱穴P4出土。5の石錐は砂岩製でP27出土であるが、当地方においては発見例が極めて少ないものである。4は小形の定角式磨製石斧で輝岩製、6の磨製石斧は輝綠凝灰岩製で、乳棒状磨製石斧の破損品を再加工したものである。7の打製石斧は結晶片岩製で、刃部片面に磨製石斧同様の研磨痕がみられる。8~12の凹石は安山岩製で当地方に一般的なもので、8は主柱穴P12、9はP10、10は主柱穴P28、11は主柱穴P22、12は主柱穴P15出土。13と14の蜂の巣石は安山岩製で小振りであるが、13は凹石には重く1360g、14は素材が薄く595gと軽いが穴の穿たれた位置から蜂の巣石とした。13は主柱穴P27、14はP12出土である。

(2) 小竪穴

小竪穴2・4(第11・12図)

第3号住居址の東でローム細粒混じり黒褐色土の落ち込みを確認した。不明瞭な点は

あったが1基の小竪穴と考え調査を進めた結果、小竪穴4と重複していた。数多い根がありこんでいたが、色調の変化には乏しく新旧関係を明らかにすることはできなかった。

小竪穴2の平面形は径106cmの円形を呈し、底面はやや丸みを持ち中央が低くなる。深さは深い真中で37cmを計り、壁の立ち上がりは良い。握り拳大から人頭大の礫11点が、ほぼ同じレベルに据え置かれたような状態で並ぶが、底面から10cm前後浮いている。

小竪穴4の平面形は径51cmの円形を呈し、底面はやや丸みを有し中央が低くなる。深さは深い真中で42cm、壁の立ち上がりは良く柱穴状のものである。

発見した遺物は、小竪穴2は土器と石器があり、小竪穴4は皆無である。

土器 破片ばかり10点出土したが、第12図1は網代底底部破片である。帰属時期は胎土および焼成からみて縄文時代後期壠の内式である。

石器 石鎚1点と凹石1点がある。第12図2の石鎚は黒曜石製、3の凹石は安山岩製である。

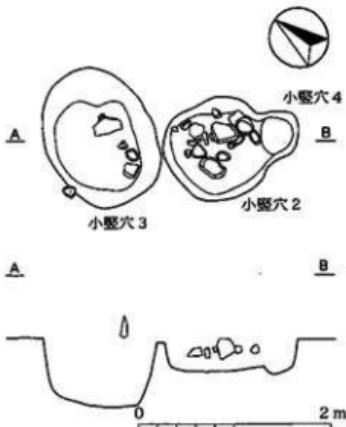
小竪穴3（第11・12図、写真図版6）

第3号住居址の東で小竪穴2と接している。ロームに黒褐色土の落ち込みを確認した。埋土は上層から黒褐色土、ロームブロック混じり褐色土、黒色土の3層に大別した。ほぼ水平の堆積であり、ロームブロック混じり褐色土は人為的に埋め戻したものようである。下層の黒色土は15cm前後を計る。なお、ロームブロック混じり褐色土に、握り拳大から子供の頭大位の数多い礫が含まれていたが、集石とか配石といったものとは違うようである。

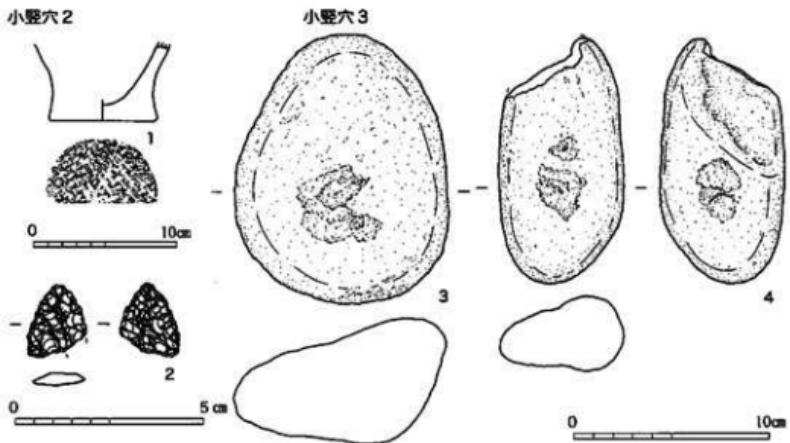
平面形は147×113cmの梢円形を呈し、底面は平で100×83cmを計るが、北壁から西壁の底部にローム中の礫が並び、底形が不整梢円形になったものと思われる。深さは78cmを計り壁の立ち上がりは良い。

発見した遺物は石器がある。

石器 凹石1点と黒曜石の原石1点がある。第12図4の凹石は安山岩製である。黒曜石の原石は図示できなかったが重さ90gである。



第10図 姥ヶ原遺跡小竪穴2・3・4
実測図 (1:60)



第11図 姥ヶ原遺跡小堅穴2・3出土土器・石器実測図
1 (1:4) 2 (2:3) 3・4 (1:3)

(3) 配 石

配石1 (第13~17図、写真※)

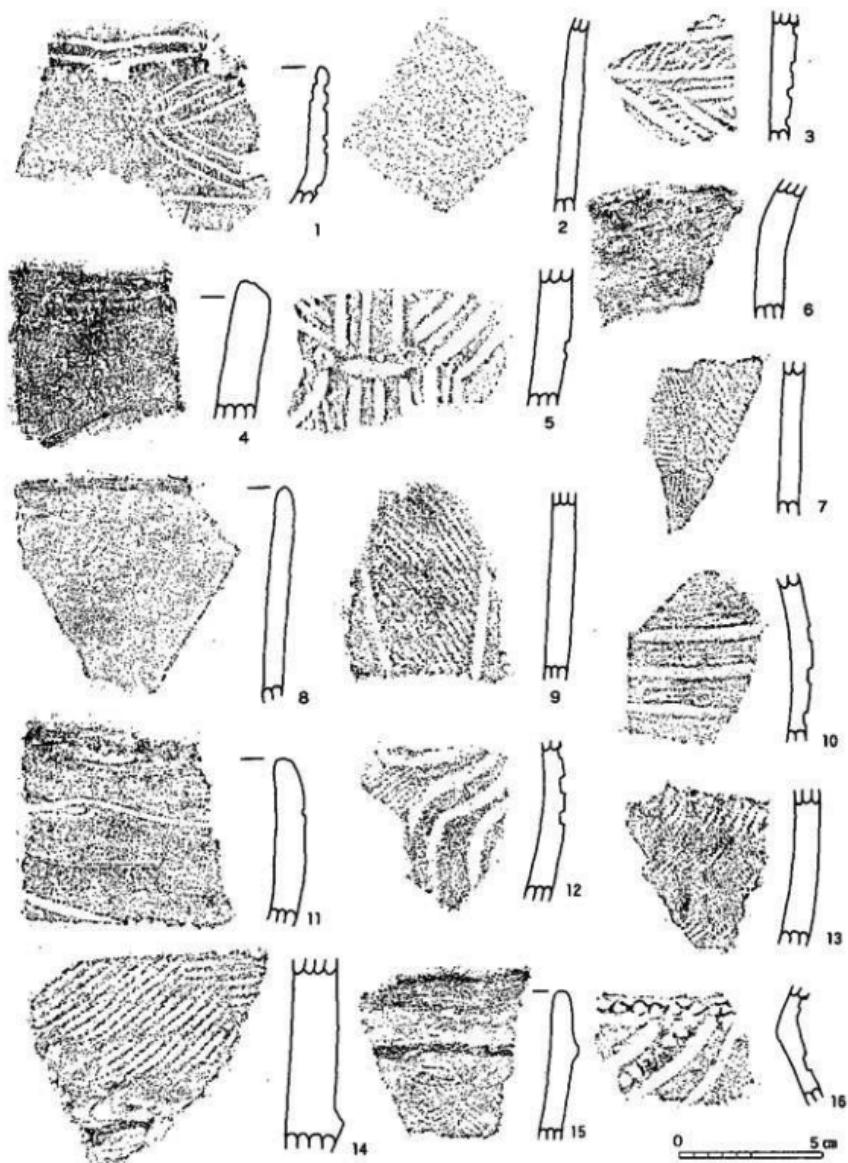
調査地区西側で検出したが、調査範囲の関係でその全てを調査することはできなかった。したがって平面形は不明であるが、検出部分は柄鏡の鏡から柄を縦に半割りしたような形である。

説明は便宜的に柄鏡の形を用いて進めるが、大きくみると自然傾斜同様に南から北に緩やかに傾き、低い方向に柄部分が位置し、大きな平板石を据えてあるが、鏡と柄の接点部はより大きな石を使い、上面は水平に鏡面は直線的に描える意識を見て取ることができる。鏡部分の外縁部も大きな石で縁を描えているが、柄部分のように厳選された石ではなく、平板石、扁平石、玉石が使われている。調査範囲壁際の鏡はぼく真中辺りが低くなり、その傾斜と石の傾きはほぼ同様で、石が集中し重なり合う箇所の観察では、人為的に並べ置くことは困難な状態で、下に有った腐食物が朽ちる過程で石は傾き重なったように見受けられるものである。

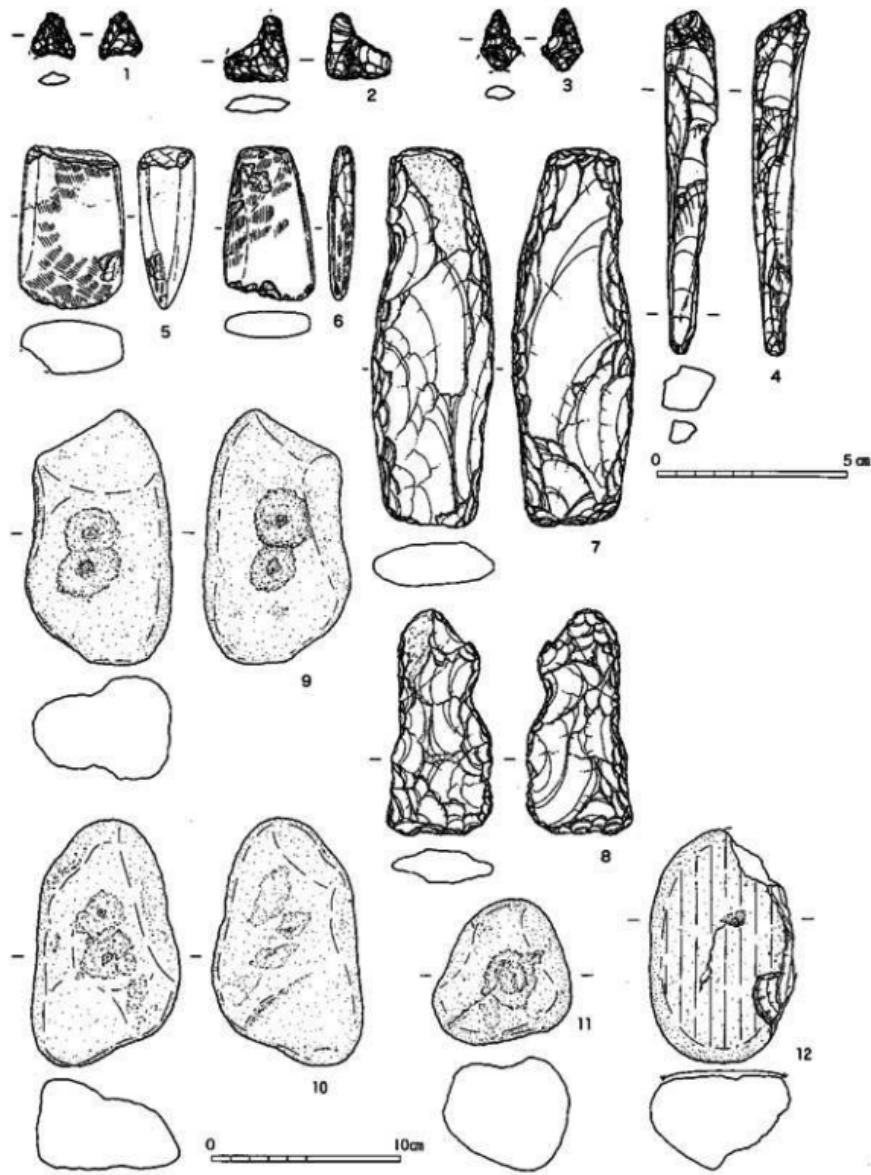
石と石の間から僅かな焼土を発見しているが、小さな塊であり火床状のものではなく、調査範囲内では火處を確認することはできなかった。土器破片と石器が出土したが、石と石の間からの発見である。磨製石斧や凹石は石器としての使命を有していたのか、それとも使命を終えた後の単なる石として配石を構成していたかは不明である。



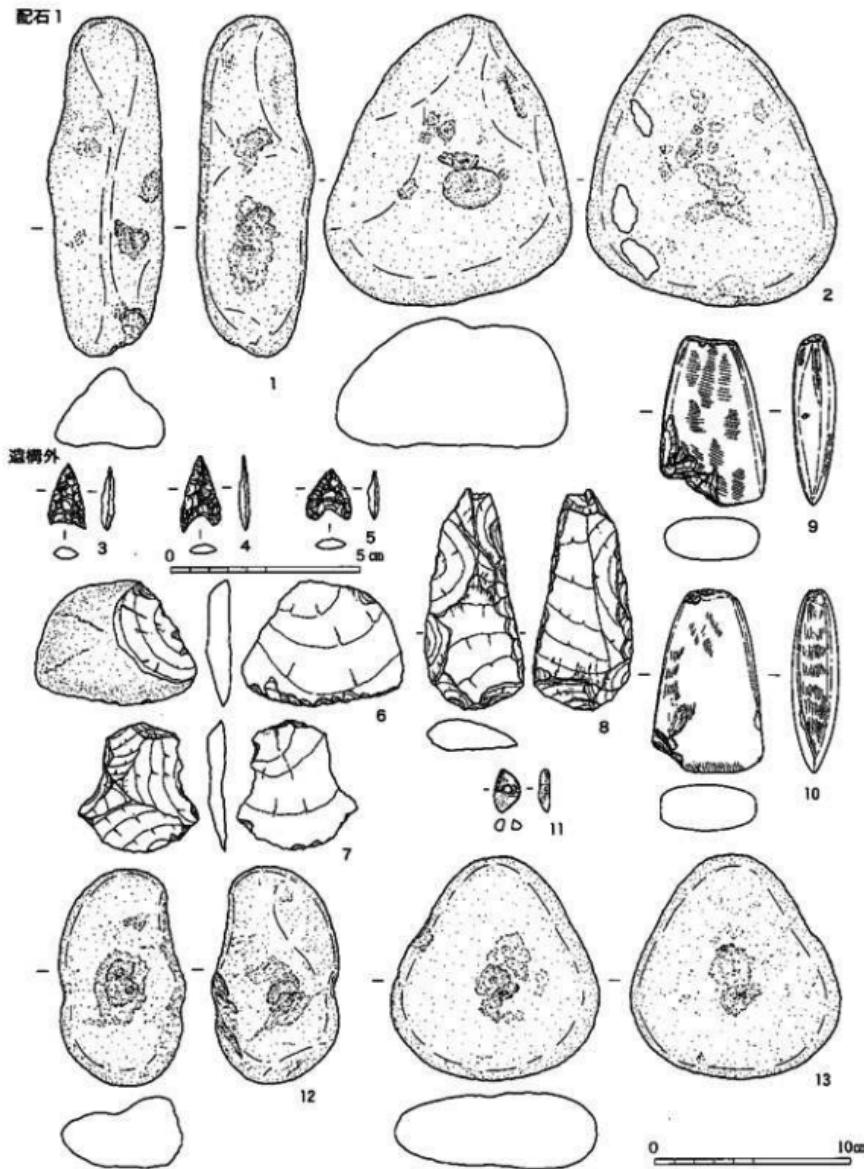
第12図 姥ヶ原遺跡記石1実測図 (1 : 60)



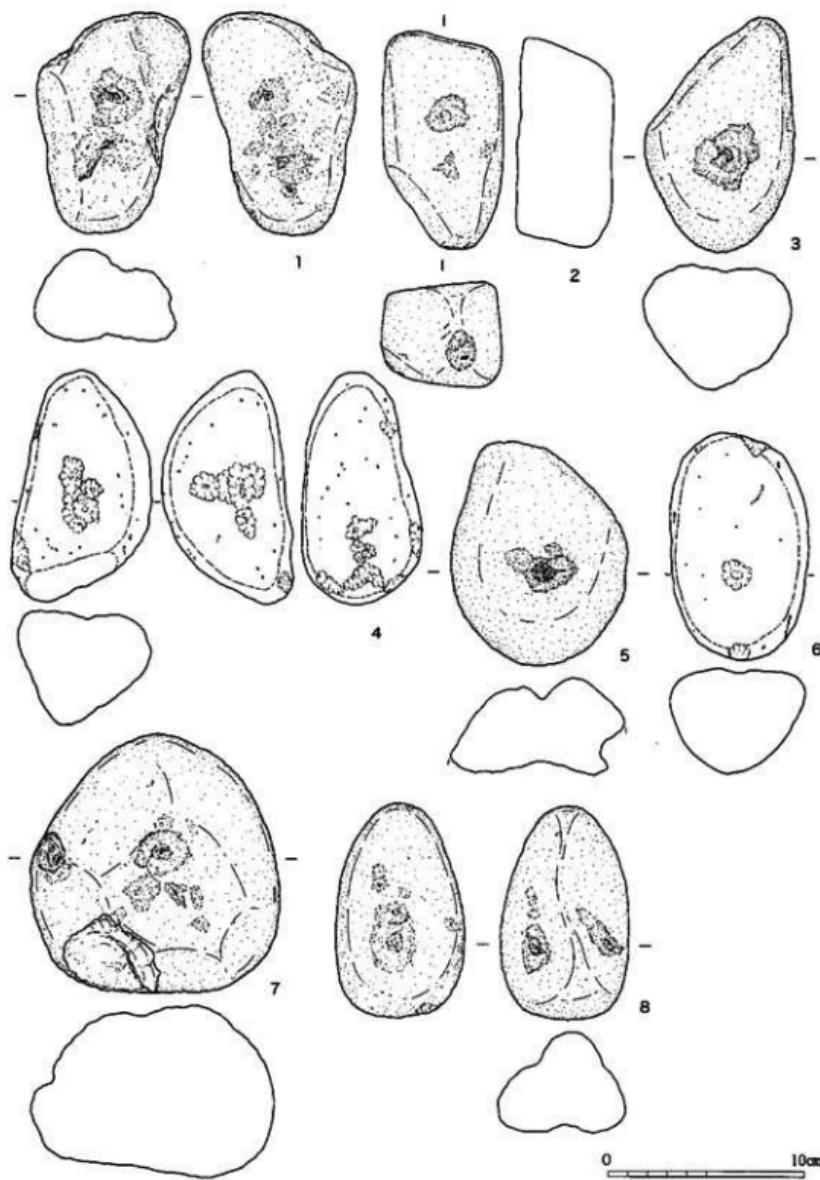
第13図 姪ヶ原遺跡配石1・遺構外出土土器 (1:2)



第14図 姥ヶ原遺跡配石1出土石器実測図 1~4 (2:3) 5~12 (1:3)



第15図 鈴ヶ原遺跡配石1・造柄外出土石器実測図 3～5 (2:3) 1・2・6～13 (1:3)



第16図 篠ヶ原遺跡遺構外出土石器実測図 (1:3)

配石下層から小竪穴など掘り込みを伴う遺構を検出することはできなかった。

発見した遺物は土器と石器がある。

土器 第15図1～5の5点を図示したが、深鉢の破片で縄文時代後期の堀之内式である。

石器 石鎌3点、石錐1点、磨製石斧2点、打製石斧2点、凹石6点がある。第16図1～3の石鎌と4の石錐は黒曜石製、5・6は定角式磨製石斧で、5は蛇紋岩製で刃部を欠損し、欠損面には使用による磨滅が顕著に認められる。6は輝緑凝灰岩製で基部を欠損し真黒色のタール状の付着物（実測図スクリーン貼付）がみられる。7・8は打製石斧で、8は硬砂岩製、7は凝灰岩製で刃部を欠損する。9～12と第17図1・2の6点は凹石で、全て安山岩製で当地方に一般的なものである。

(4) 遺構外出土の遺物

発見した遺物は土器・石器・石製品がある。

土器 破片ばかりで第15図6～16の11点を図示したが、縄文時代後期の堀之内式である。

石器 石鎌3点、磨製石斧2点、打製石斧1点、横刃形石器1点、石匙1点、凹石10点がある。第17図3～5の石鎌は黒曜石製、9・10の定角式磨製石斧は蛇紋岩製、8の打製石斧、6の横刃形石器、7の石匙は硬砂岩製である。12・13と18図1～8の凹石は安山岩製である。

石製品 垂飾は第17図11の1点で、小振りであるがヒスイ製である。

4 ま と め

調査は、個人の住宅建設という限られた範囲であり、黒色土中に構築された遺構で表土剥ぎの段階で破壊するという大きなミスをしたが、住居址2軒、小竪穴2基、配石1基を検出し、それに伴う土器と石器を発見した。

発見したヒスイ製の垂飾は小振りであったが、該期におけるヒスイ製品の必要性を示す資料である。また、定角式磨製石斧は5点と多く、乳棒状磨製石斧は再加工が施された1点で、後期における磨製石斧のあり方を明確に示すものであった。定角式磨製石斧の破損は似通り、用途が同じであった可能性は高く、用途研究上の好資料になろう。

発見した遺構は、縄文時代後期の堀之内式に帰属するが、当地方では発見例が少ないうえに、緩やかとはいへ北向き斜面に當まれた集落址であり、縄文時代後期の遺跡立地のあり方など、今後に残した課題は大きいようである。

II 御射山北遺跡

1 発掘調査の経過

(1) 発掘調査に至る経過

建築工事届調査書で住宅建設の計画を知るが、たまたま予定地に御射山北遺跡（原村遺跡番号59）が所在していたため、その保護については関係者と数回にわたり協議を行った。

本来なら遺跡は現状のまま保存することが最も望ましいことであるが、住宅建設の要望は強く「記録保存やむなき」との結論に至り、平成15年度に緊急発掘調査を実施し、記録保存をはかる方向で同意をみることができた。

その後も調査日程等の打ち合わせを行い、原村教育委員会は国庫から発掘調査補助金交付を受け、平成15年12月15日から25日にわたって緊急発掘調査を実施した。

(2) 調査組織

事務局 原村教育委員会

教育長 津金 喜勝

学校教育課長 佐貫 正憲

文化財係長 平出 一治

文化財係 平林とし美

調査団 団長 津金 喜勝（原村教育委員会教育長）

調査担当者 平出 一治

調査員 平林とし美

調査参加者 発掘作業 小林 りえ 小松 弘 坂本ちづる

清水 正進 田中 初一 津金たか子

西沢 寛人

整理作業 坂本ちづる

(3) 発掘調査の経過

- 平成15年12月15日 発掘準備をはじめる。
- 18日 トレンチの設定を行う。
- 24日 重機でトレンチの掘削、引き続き人力でトレンチ内の精査を行う。
- 25日 トレンチ内の精査、片付けを行い調査は終了。

2 調査の方法

(1) 位置と環境

御射山北遺跡（原村遺跡番号59）は、長野県諏訪郡原村判之木の西方で、中央自動車道の諏訪南インターの東方約1100m付近に位置し、県道払沢—富士見線に接している。この辺りは茅野市・富士見町・原村の3市町村が境界を接し合い、行政区分は複雑で本遺跡が立地する尾根は頂部付近で富士見町と接している。したがって、遺跡の南半分位は富士見町、北半分位は原村である。『原村誌 上巻』の御射山北遺跡で、富士見町を茅野市と間違って記載したが、ここで改めておきたい。

この辺りには、当地方特有の東西に細長く伸びる大小様々な尾根がみられ、尾根上から南斜面に第2図と表1に示した遺跡が埋蔵されている。しかし、すでに県営御射山地区畑地帯総合土地改良事業、県営担い手育成基盤整備事業深山地区をはじめとする開発事業で消滅した遺跡が多い。事前の発掘調査で、出土量こそ少なかったが中世の土師質土器が発見された遺跡は多く、御射山御狩の祭場が明らかになりつつあり、希薄とはいえ「諏訪神社信仰関係遺跡群」を考えることができるようである。

本遺跡は、八ヶ岳から流下する稗田川（下流では御射山沢川）の右岸のやせ尾根に立地し、標高は997m前後をはかり、地目は普通畑で、南斜面の富士見町地籍には一部水田もみえる。

調査地点は遺跡北西の緩やかな北斜面にあたるが、前記したようにやせ尾根であったためか、黒色土の堆積は薄いうえに、耕作機械が大型化したことにより、頂部付近は何時とはなしに削られ平坦化されロームが耕作土となっている。したがって遺跡の保存状態はよくない。

遺跡の発見は古いが、学会に報告されることとなかったようで、遺跡名をはじめ混乱していることが多く、昭和54年度に長野県教育委員会で実施した「八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査」の折りに、遺跡名は「御射山北遺跡」としたが、出土遺物については不明なままで

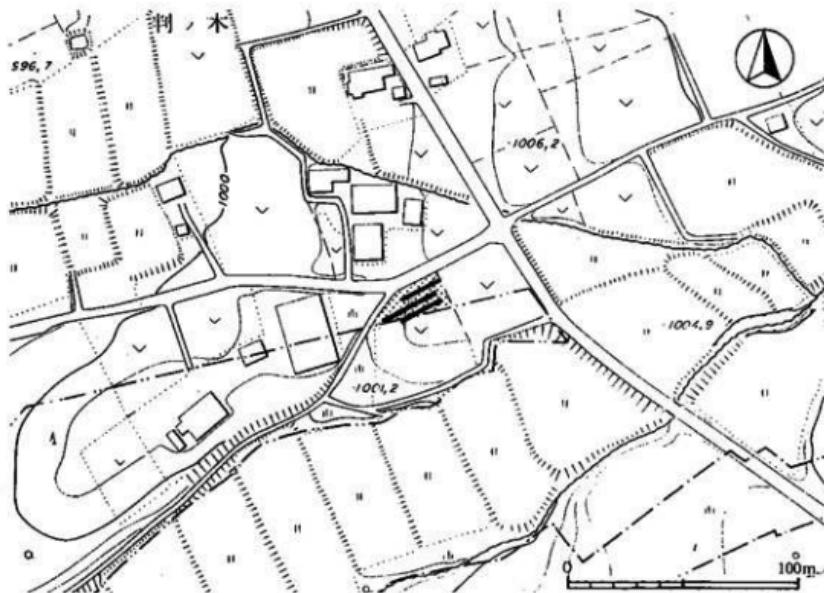
ある。『原村誌 上巻』には次のような記載がある。長くなるが全文を紹介しておきたい。

(59) 御射山北遺跡

判の木区の南方に位置する遺跡である。『諏訪史一』で頭殿沢遺跡と呼称して土器(厚)と石鎚の出土を伝えているのが本遺跡と考えられる。

御射山神社とも深い係わりを持つと思われ、稗田川の川筋には土師器・須恵器および灰釉陶器の破片が疎ではあるが極めて広い範囲に散布している。現に原村教育委員会には「頭殿沢」と注記された土師器と須恵器が保管されているが、その発見は古く今もって確実な出土地点は究明できないでいる。したがって現段階では遺物の散布する範囲全体を遺跡として包括するのは躊躇している。

昭和54年度分布調査の折に、平安時代の土師器と須恵器の破片が比較的まとまって採集できた地点を遺跡として把握してはいるが、できるだけ早い機会に稗田川の川筋を詳細に踏査し、遺跡の範囲を明確にしておかなければならぬ。



第17図 御射山北遺跡発掘区域図・地形図 (1 : 2500)

(2) 調査方法と層序

発掘調査の対象は、整地が伴うこともあり第19図に示した住宅建設用地全域である。住宅の基礎に合わせたトレンチを設定し、重機で巾1.2m(バケット巾)のトレンチを掘削し、引き続き人力でトレンチ内の精査を行い、遺物と遺構の検出に勤めたが、何れも発見するまでには至らず調査を終了している。

調査は、ローム層直上までとしたが、南のトレンチは浅く、北のトレンチは深くなる。トレンチの西外れは急激に深くなり、真黒色土の堆積がみられた。ロームの地山は急激に落ち込んでいることは明らかであるが、調査対象地の関係でその全貌を確認することはできなかった。

南のトレンチは尾根の頂部近くに位置し、ロームを耕作土としている。したがって耕作土の直下がハードローム層となる。耕作土下層に褐色土の堆積が認められたところも、地山のローム層には耕作の跡がみられる状態で、層序は安定していなかった。基本的には、上層からローム粒混じりの黄褐色土層(耕作土)、褐色土層、ローム漸移層、ローム層である。

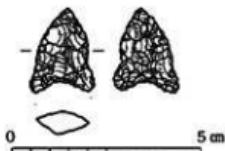
座標値をもたせた基準杭の設置は、株式会社写真測図研究所に委託した。調査面積は79m²である。

3 遺 物

発掘調査で遺物の発見はなかったが、隣接地で縄文時代と平安時代の資料を僅かに表面採集している。

縄文時代の遺物は、黒曜石製の石鎌2点、黒曜石の小剥片7点、粘板岩フォルンフェルスの剥片1点があり、第18図の石鎌1点を図示した。

平安時代の遺物は、土師器小破片1点、灰釉陶器小破片1点があるが、いずれも図示できるものではない。



第18図 御射山北遺跡出土石器実測図(2:3)

4 まとめ

やせ尾根の緩やかな北斜面が調査の対象であり、居住域としては適していなかったようで、遺構を検出するまでには至らなかったが、隣接地で縄文時代と平安時代の資料を表面採集することができ、遺跡外縁部のありかたの一端を知ることができたものと思っている。

III 裏の尾根遺跡

1 遺跡確認調査の経過

(1) 遺跡確認調査に至る経過

開発関係者から遺跡の照会があり診療所建設の計画を知るが、隣接地に裏の尾根遺跡（原村遺跡番号63）が所在しているが、遺跡の範囲・性格など不明なことが多く、保護処置はできない状況であった。

遺跡を保護する上で遺跡確認が急務となり、長野県教育委員会文化財・生涯学習課の指導と、関係者の協力をいただく中で遺跡確認調査を実施することにした。

工事時期の関係もあり、遺跡を確認した時には緊急発掘調査に切りかえられる体制を整え、原村教育委員会は国庫から発掘調査補助金交付を受け、平成15年8月18日から22日にわたりて遺跡確認調査を実施した。

(2) 遺跡確認調査組織

事務局 原村教育委員会

教育長 津金 喜勝

学校教育課長 佐貫 正憲

文化財係長 平出 一治

文化財係 平林とし美

調査団 团長 津金 喜勝（原村教育委員会教育長）

調査担当者 平出 一治

調査参加者 小島 政雄 清水 正進 田中 初一

(3) 遺跡確認調査の経過

- 平成15年8月18日 遺跡確認調査の準備をはじめる。
- 19日 関係者と調査期間・方法などの打ち合わせを行う。
- 20日 トレンチの設定、重機による掘削、人力によるトレンチ内の調査をはじめる。
- 21日 引き続きトレンチの掘削、トレンチ内の調査を行う。
- 22日 重機でトレンチの埋め戻し、片付けを行い遺跡確認調査は終了。

2 遺跡確認調査の方法

(1) 位置と環境

裏の尾根遺跡（原村遺跡番号63）は、長野県諏訪郡原村中新田の北に位置し、深義寺に接する北の尾根が遺跡である。

この辺りには、当方特有の東西に細長く伸びる大小様々な尾根がみられ、尾根上から南斜面に第2図と表1に示した遺跡が埋蔵されている。しかし、すでに県営担い手育成基盤整備事業深山地区や開発事業で消滅した遺跡が多い。

本遺跡は、八ヶ岳から流下する矢の口川左岸の尾根に立地し、標高は1085m前後をはかり、地目は普通畠・山林・墓地である。確認調査地点は尾根南で、すでに整地され駐車場として利用されていた。

原村教育委員会に調査記録は残されていないが、昭和50年度から52年度に実施した「原村番飼場地区団体営畠地帯総合土地改良事業」の概要書をみると、遺跡は事業地内に含まれている。『原村誌 上巻』に次のように記載されている。

(63) 裏の尾根遺跡（中新田）

中新田の北に隣接する遺跡で、古くから土器の発見は知られていたがあまり注目されたことはない。

村教育委員会に「中新田寺北浦の畠より 中新田1の3芳沢鉄臣」と注記された無頭石棒が保管されている。昭和27年に発見されたもので、石棒の基部はボッキリと折れた状態である、半花崗岩を敲打成形した後に研磨整形を丹念に施した優品で、その大きさは高さ46cm、基部の長軸14.6cmを計る。

その後の踏査でも中期の曾利式土器破片が採集されてはいるが、遺跡の保存状態は極めて悪い。

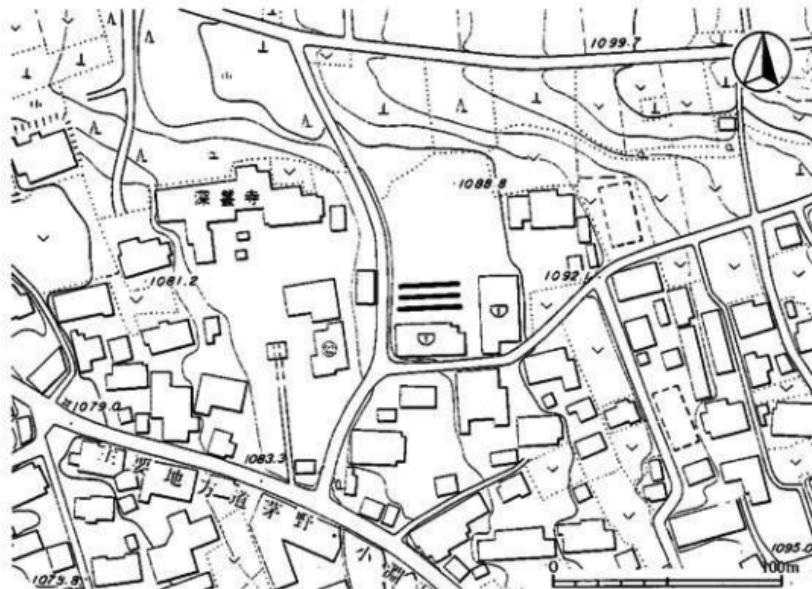
(2) 遺跡確認調査方法と層序

診療所建設予定地の南端には解体予定の古い集荷場の建物があり、周知の裏の尾根遺跡は北側に隣接していたため、建物北側の遺跡寄りにトレント3本を設定した。建物に平行するトレントで、それは地形の傾斜方向にはほぼ一致する。

確認調査は、重機で巾1.2m（重機バケット巾）のトレントを掘削し、引き続き人力でトレント内の調査を行い、遺物と遺構の検出につとめた。しかし、遺物・遺構とも発見するまでに至らず調査は終了している。

トレントの掘削は、基本的にローム層上面までとしたが、トレント西側2/3位には漆黒色土が堆積していた。村内における発掘調査で、この漆黒色土層から遺物・遺構が発見されたことはないため10cmほど掘り下げた面で打ち切った。トレントの深さは、35~135cmの盛り土があったこともあり70~150cmと深い。

トレント東側の疊混じりローム層の直上にも薄いが漆黒色土層の堆積はみられ、革など



第19図 裏の尾根遺跡確認調査区域図・地形図（1：2500）

水辺にみられる植物遺体が包含されていた。これは水位の高いことを示すものであり、居住域には適していなかったようである。調査（トレンチ）面積は100.8m²である。

確認調査の結果、遺跡から外れていることは明らかになったが、遺跡周辺の一端を知ることができ、現場における記録類には裏の尾根遺跡と表記してあるため、遺跡から外れてはいるが本確認調査を裏の尾根遺跡第1次発掘調査としておきたい。

3 ま と め

周知の裏の尾根遺跡に隣接していたため、関係者の協力をいただく中で、遺跡確認調査を実施したが、遺物・遺構を発見するまでには至らず、遺跡から外れていることが明らかになった。

IV 結 語

つい最近まで山林の遺跡は保護される。と安易に考えていたが、その山林に住宅建設や宅地造成という開発の波が押し寄せ年々増える傾向にある。それは農地の整備が行われたことにより、開発可能な土地が狭くなり山林に目が向けられてきたことによるが、山林の開発はこれからも続くものと思われる。それに伴う保護も続くことになるが、未だ山林に立地する遺跡は範囲や性格が明らかにできないいるものが多く、早い機会に明確にしていかなければならないようである。

本調査では、姥ヶ原遺跡で住居址2軒、小竪穴2基、配石1基を発見したが、当地方では発見例が少ない縄文時代後期の堀之内式期のもので、好資料を得ることができたと思っている。しかし、緩やかとはいへ北向き斜面に営まれた集落址であり、遺跡立地のあり方など今後に残した課題も大きいようである。

御射山北遺跡は遺物や遺構を発見するまでに至らなかった。また、裏の尾根遺跡の確認調査地点は、居住域から外れていることが明らかになり、開発は計画通り進められたが、今後も開発と保護というお互いの立場を理解し合うなかで、より良い選択をしていかなければならぬと思っている。

最後に、理解ある協力をいただいた関係者各位ならびに調査にたずさわられた方々に厚くお礼申しあげる。

姥ヶ原遺跡



第2号住居址
(北から)



第2号住居址
埋甕炉検出状態
(北から)



第2号住居址
埋甕炉
(北から)

写真図版 2



姥ヶ原遺跡

第3号住居址
検出状態
(南から)



第3号住居址
全景
(南から)



第3号住居址
全景
(西から)

姥ヶ原遺跡

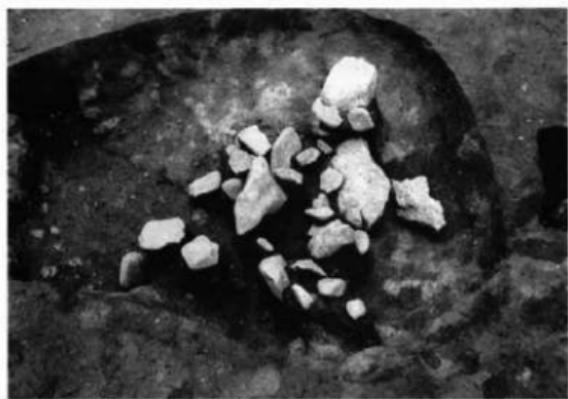


第3号住居址
奥壁集石①



第3号住居址
奥壁集石②

第3号住居址
P28壁

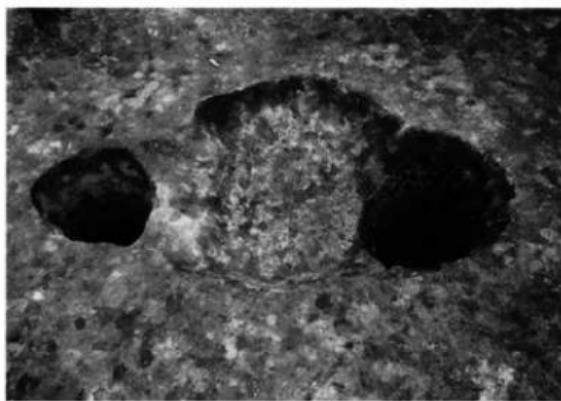


写真図版 4



姥ヶ原遺跡

第3号住居址
P12環



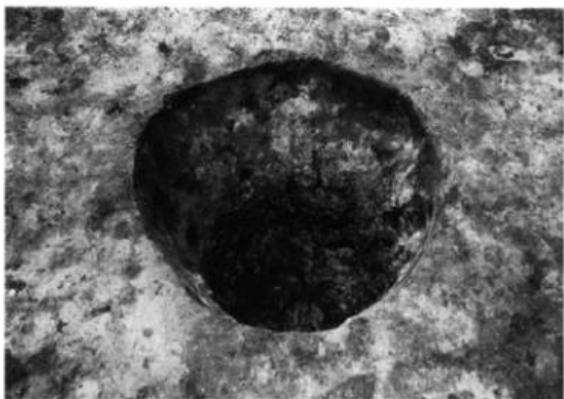
第3号住居址
P10, 11, 12



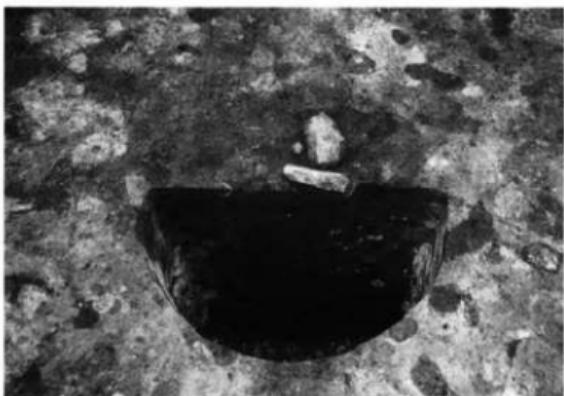
第3号住居址
P4環

姥ヶ原遺跡

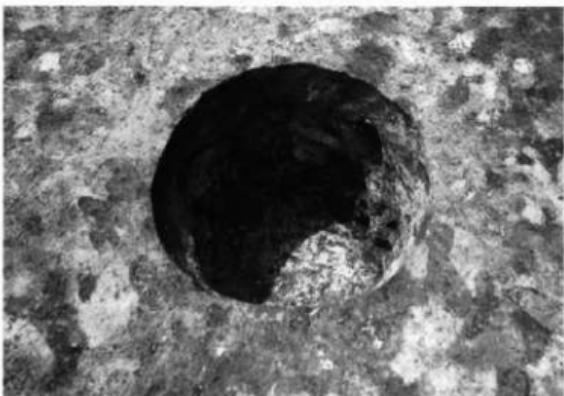
第3号住居址
P 4



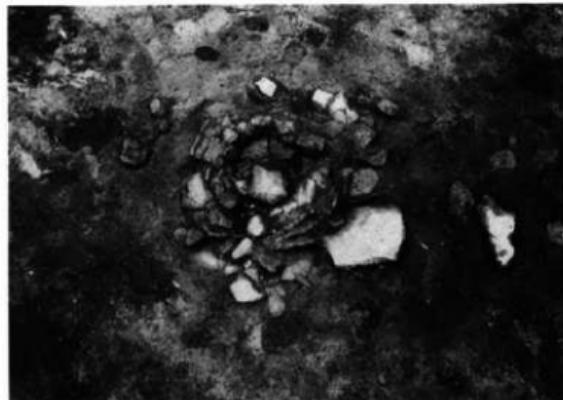
第3号住居址
P 6 土層



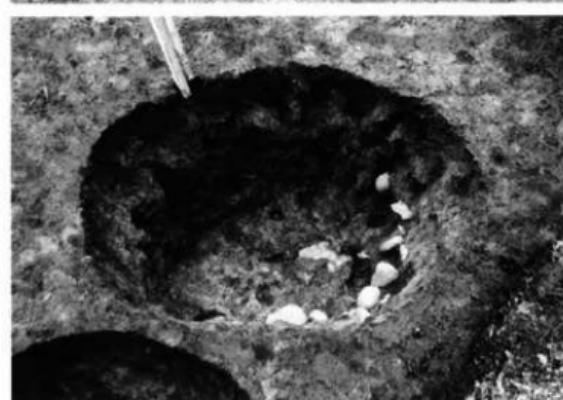
第3号住居址
P 6



写真図版 6



第3号住居址
埋甕炉出土状態



姥ヶ原遺跡



配石 1
(北から)



配石 1
(南から)



配石 1
(東から)

写真図版 8



姥ヶ原遺跡

発掘風景
(北東から)



御射山北遺跡

調査トレンチ
(東から)



裏の尾根遺跡

調査トレンチ
(西から)

報告書抄録

ふりがな	うばがはらいせき みさやまきたいせき うらのおねいせき
書名	姥ヶ原遺跡 御射山北遺跡 裏の尾根遺跡
副書名	平成15年度住宅建設に先立つ姥ヶ原遺跡（第3次）・御射山北遺跡緊急発掘調査、診療所建設に先立つ裏の尾根遺跡範囲確認調査報告書
卷次	
シリーズ名	原村の埋蔵文化財
シリーズ番号	65
編著者名	原村教育委員会
編集機関	原村教育委員会
所在地	〒391-0192 長野県諏訪郡原村6549番地1 TEL 0266-79-7930
発行年月日	西暦 2004年03月

所取遺跡名	所 ^レ 在 ^{スル} 地 ^方	コード	北緯 度分秒	東經 度分秒	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村 [・] 遺跡番号					
姥ヶ原	長野県諏訪郡 原村菖蒲沢	3637 51	35度 57分 3秒	138度 12分 27秒	20030501 /		平成15年度 住宅建設
御射山北	長野県諏訪郡 原村判之木	3637 59	35度 56分 23秒	138度 13分 28秒	20031215 /	79.0	平成15年度 住宅建設
裏の尾根	長野県諏訪郡 原村中新田	3637 63	35度 57分 11秒	138度 14分 23秒	20030818 /	100.8	遺跡確認

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
姥ヶ原	集落跡	縄文時代	後期 竪穴住居址 2軒 小竪穴 3基 集石 1基	後期土器、石器、石製品 (ヒスイ製垂飾)	原村においては数少ない 縄文時代後期の集落遺跡 で、住居址は2軒と少なかつたが好資料である。
御射山北	散布地				遺跡外縁部の一端を知ること ができた。 遺跡から外れていた。

原村の埋蔵文化財65

姥ヶ原遺跡 御射山北遺跡 裏の尾根遺跡

平成15年度 住宅建設に先立つ姥ヶ原遺跡(第3次)・御射山北遺跡
緊急発掘調査、診療所建設に先立つ裏の尾根遺跡確認調査報告書

発行日 平成16年3月

発 行 原村教育委員会
長野県諏訪郡原村

印 刷 ほおづき書籍(株)

